

小説

曼荼羅華・マンダラゲ

ゆとろ 満

「小山先生、梶山を知っているわね。彼女、今、すごくヤバイの」

唐突な植野の電話に小山は、「梶山さん？」とオウム返しに応えた。

「ほら、川崎に転校した子よ。夫婦で別れるの別れないのと大揉めし、校長室まで出向いて先生に話を聞いてもらったじゃない。結局だめで、母親の有里は、子どもたちを連れて川崎の実家に帰ったじゃない。もう先生ったらボケちゃってんだから。あん時ジュリは五年生だったでしょ」

「それっていつの話ですか」

「ええと、七、八年前かなあ。先生覚えていると思うんだけど」

七、八年も前のことを昨日のように話す植野に呆れながらも、それでもなんとか小山は思い出そうと必死になった。植野の次男の智晴は、小山が主催する「学習支援センター」に通室している。この日は、智晴の学習支援の日だった。小山はなんとか当時勤めていた美ヶ原小学校の出来事を思い返そうとした。七、八年前という。校長室で夫婦げんかの仲裁など滅多にない。それだけに、小山は「あつ」と言っていて思い出した途端、鮮明にその時の情景が浮かんできた。

「分かった、思い出しましたよ。一時緘黙だったジュリさんですよ」

「かんもく？」

「四年生の中ごろから学校では全然話さなくなったでしょ」

「ああ、そういえばそうだった。でも五年生の秋ごろには治ったと母親から聞いたわ」

「そつそつ、あの時はついぶん心配したんですよ。そのジュリさんがどうしたっていうんですか」

「そのジュリとイトヨでばったり遭って、ショックなことを聞いてしまったのよ」

イトヨとはスーパーマーケットのイトーヨーカドーの略称である。若い子たちは長いものは何でも縮めて言ってしまう。「吉野家牛丼」が「ヨシギユウ」のような類である。「彼女、家出してるのよ。それで、なんか知らないけど兵庫へ行くんだって。とにかく私は自慢じゃないけど静岡から先、南へ行ったことないんだから、なんかすこく心配」

「南ではなく西だろつ」と、小山は思うが言葉にはしない。植野の話は延々と続きそうな気配である。何とか止めないと小山は思案する。

「先生、聞いてんの。しつかりしてよ」

小山の逡巡を察知したような植野の物言いである。

「ああ、だいじょうぶですよ。しつかり聞いております。ところでどんな用事で兵庫へ行くわけ。それがポイントだと思っけど」

「そう、そう。それが肝心なことね。やっぱり先生は先生だね。大事なことは逃さないわ」

少しの間、会話が途切れる。植野が梶山に問いかけているのだろう。

「メールで連絡があつたんだって。仕事が見つかったから来ないかと」

「梶山さん、あつ、チランさんだった。電話では話が見えないから教室に戻ってくださいよ、その上でゆっくりお話ししましょう。智晴くんの勉強もちょうど区切りがついたところですから」

「じゃあ、そうします」

植野知覧は、「ウエノ チラン」と読む。祖父が神風特攻隊上がりで、多くの戦友たちが出撃した知覧基地にちなんで命名したという。彼女もこの名前を気に入っているのだが、漢字が嫌いで勝手にカタカナに直していると、初めてこのセンターに来たときに話していた。しかも、名を呼

ぶときには姓ではなく、名前で「チランちゃん」にしてほしいというのだった。小山は変な人だなと思ったが、議論をするような問題でもなかったので「承知した」と答えておいた。しかし、まさか本心とは思わなかったが、実際は「植野さん」と呼ぶたびに訂正を迫られた。

智晴は彼女の次男で、現在小学三年生である。一年生の一学期終わりごろから不登校に陥り、回復しないまま今日まで来ている。小山のところには昨年十月ごろから通っている。今はちょうど十月だから一年を迎えるところである。週二回母親が自転車に乗せてくる。痩せて小さく、とても三年生には見えない。幼くみえるのもいじめの原因の一つのようだ。智晴の智も知覧にちなんでの命名と母親は言っていた。

イトーヨーカドーは教室から徒歩三分ほどの所にある。駅にも近くいたって便利な場所に不動産屋を経営している木村が、長いこと空いていた五階の部屋を小山に無償で貸してくれてる。トイレ、小さなキッチンがついた十坪ほどの部屋である。現在、中学生が三名、小学生が七名通室している。このうち不登校児は小学生が二名、中学生が一名である。ほかの子たちは補習が主となっている。智晴は他の子たちと一緒に学習はできないため、単独の学習支援と

なっている。当初、学習中も母親は同席していた。しかし、智晴が少しでも学習に戸惑うと口出ししてきた。これでは智晴も落ち着いて学習はできないし、小山もやりにくくしてしまうがなかった。そのため、学習中は、母親には席を外してもらうことにした。東南電鉄の美ヶ原駅は新宿に四十分とアクセスに恵まれている。そのため、首都圏のベッタタウンとして発展し、今なお膨張を続けている。駅周辺は多くの商店街があり、ヨーカドーの入ったビルはこの商店街の中核になっている。植野が子ども学習時間の小一時間を過ごすのは苦もないことであった。

カツ、カツという靴音が次第に高くなってきた。植野が戻ってきたのだ。

「先生、苦しい。この五階何とかしてよ。私、死んじゃう。大体、五階なのにエレベーターがないなんて信じられる。とにかくお願いだからエレベーターをつけて」

むっちりとした体の植野は肩で息をしている。確かに一気に五階まで上がってくると小山でさえ息があがる感じがしばしばである。

「はい、はい、よく分かりました。オーナーに伝えておきます」

植野はいつものこととあまり気のない返事である。

植野の背後にジュリが立っている。植野は百六十センチ近くある大柄の女性だ。まだ三十代半ばである。ヒールの高いブーツを履いているものだからかなりの身長に見える。

ジュリは、その植野と同じぐらいの背丈である。植野にちょうど体が隠れてしまっている。小山からはよく見えないのである。その見えないジュリが、

「先生、お久しぶりです。ジュリです。突然お邪魔してごめんなさい」

と、いかにも今時の若い子のように明るく、軽い。

「あっ、しばらく。中へ入ってください。とにかくよく来てくださいましたね」

植野がジュリを部屋の中に入るよう進めている。広くもない部屋である。ジュリはさすがに遠慮しいしい入ってきた。植野はその姿を見て驚いた。びっくりするほどきれいなのである。スレンダーな肢体に彫の深い顔立ちである。茶色に染めた髪もよく映える。小山が記憶しているジュリは、痩せた、小さめの女の子であった。しかし、母親似の色白い子で、髪が長いのが印象的であった。女の子の十年というの途方もないことをもたらすものだ、と小山はしみじみと思った。

「先生、びっくりした。私も会ったときびっくりしたのよ

名前を言われなきゃ分かんなかったわ。でもよくジュリは私のことを覚えていてくれたのね」

「そりゃあ、チランママには随分お世話になったんですもの、忘れたりしちゃ罰があたりますよ。でも、チランママは相変わらずきれいよ」

植野はジュリにもチランと呼ばせていたようであった。

「まあ、この子ったらうれしいことを言っつわねえ」

「とにかく二人とも掛けてください。あっ、そうだ。智晴くんは奥でゲームでもしてよ。すぐにお話は終わるから」

そう言うと、小山は台所に向かった。

「ジュリちゃんの口にはお茶は合わないかもしれないけど、これしかないの。喉うるおしに飲んでください。チランさんもどうぞ」

「先生、悪いわね。私何か買ってこようかしら」

「お話が馳走だからこれで十分かもね。ジュリちゃん我慢して」

「どうぞ先生もチランママもお構いなく。私はちょっと先生に挨拶しようと思ってただけですから」

「じゃ、少しお話を聞こうかね。教え子に会うというのはうれしいものですからね」

小山も二人に向かい合うように腰を下ろした。開け放った窓から秋のさわやかな風が吹き込んでくる。最近とみに増えた高層マンションがまるで雨後の筍のように、しかも無秩序に建っている。その上にまだ、建築中のものもある。駅に至近ということもあってか、また、ローン金利が安いせいか分譲のマンションはあつという間に売れていくという。

「小学校を卒業してからもう何年になる」

小山はくだけた言い方になった。目の前の成人したジュリと記憶の中のジュリとはどうしても落差と違和感がつきまとっている。距離を詰めるにはよりくだけた表現が適切のように思えたのだ。

「あたし、今、十九歳だから八年かしら。あつという間です」

ジュリは、「です」という語尾を長く伸ばして言った。

「でも、校長先生、昔とちつとも変わりませんね。相変わらず若々しいわ。先生は休み時間に私たちとドッチボールや縄跳びを一緒にしてくれたでしょう。その頃は当たり前と思っていたけど、年齢を重ねてきて、あんな校長先生ってなかなかいないんだって分かったのよ。それで先生のこととはよく覚えているし、懐かしかったのよ」

そうになった。

「その前に仕事が見つかったということの説明をしたら。

先生もそのことを心配しているみたいだから」

ジュリは、意を決したようにして話し出した。

改札口を出て、転校して以来の街の様子を珍しげに見渡しながらそぞろ歩いていたら、若い男に声を掛けられた。なかなかのイケメンで、話し方も丁寧であった。服装もきちんとしていて一見会社社員風に見えた。「商談で人に会う予定だが、小一時間ほど間があるのでお茶を付き合ってください」と誘われた。ジュリにしてもさしたる目的もなかった。誘われるままに「オチャした」のだった。

「それはまずいわよ。このウツハラ界限はこの手の男が最近多いのよ。どうやら組織のモンっていう評判だけだね。

そいでどうなったの」

植野は美ヶ原をウツハラと言う。小山はあれあれまたかっと思つた。

「あたしもそれぐらいは察しがついたわ。でも、どうやって時間をつぶそうかと思つていたものだから、つい渡りに船と乗ってしまったの。それにいまどきあつたばかりの子とお茶するなんて普通のことですよ」

「男から誘いがあつたでしょう」

「いくつになつてもほかの人に褒めてもらうことはうれしね。若く見られるのは退職してからあまり悩むこともないからかも。ところでどうして美ヶ原に来たの。友だちにでも会いに来たの」

「もうこつちの子たちとはほとんど付き合ひがないの。どうしてかしら、気が付いたら美ヶ原駅に降りていたのよ。鳩のように帰巢本能が働いたのかしら」

「いつ、家を出たの」

「もう一ヶ月近くなるかしら」

「一ヶ月も」

植野は大きな声を出し、身をのけぞらした。

「一ヶ月の間どうしてたの」

「それはいろいろあつて」

「そのいろいろが大事よ。この際だからなんでも話しちゃいな。先生もあたしも口が堅いからだいじょうぶよ。それにジュリ、あんた困りごとを抱えてんでしよう。何もかもぶちあげないとベストな答えがでないじゃない」

植野はなかなか話の引き出し方が上手である。小山は感心してしまった。人の隠れた才能は、ひよつとした弾みで出てくるものなのだ、と小山は感じ入ってしまった。それにしても口が堅いという植野のセリフには小山も吹き出し

「あつたけど私はすぐに断つたわ。自分のハンサムぶりを鼻にかけている男って嫌いだから」

「それは正解だったわね」

「でもね」

「やつぱり、続きがあつたのね」

「たいしたことではないのよ。人を探しているって言うからなにつて聞いたの。そしたらレストランの従業員だというのよ」

ジュリはこう言う姿勢を正した。そして、

「ちよつと遠いのだが、男の知り合いでオーナーシェフが経営するイタリアレストランで、事業拡大で至急人をほしがっている。絶対に間違いない店だ」と、言う。

「ジュリは結局その話に乗つたのよね」

「ええ、まあそんなとこだけだ。正社員っていうのは魅力なの」

「ジュリ、女狩りつて知っている。若い子をターゲットにして売り飛ばす商売よ。その筋のビジネスよ。きつとそれに間違いないわよ。やめなさいよ」

「私もそれぐらい察しがついたけど、ここまで言つたからホントのこと言つけど、家出の件は男がらみもあるのよ。しつこい男につきまとわれどうしてもこの男から離れたい

のよ。そうでないと殺されるかもしれないのよ」
「えっ、そんなに大変なこと抱えていた。ママに話したの」

「親なんて私のこと全然関心ないわ。ママは昔も今も男に夢中よ」

「そんなこと言ったって、やっぱり心配していると思うわ」

「無理、無理。迷惑するだけ」

意外な話の展開に、小山は差し挟む言葉がなかった。

「でも、一ヶ月も音信不通じゃいけないよ。ジュリから無理だったら私がしておくよ。それにジュリのママとはしばらく話していないし、いい機会だわ」

「それがいいですね。そうした方がいいですよ。いやそうすべきです」

そう言いながら、小山はいかにも教師が言いそうなセリフだと苦々しく思った。

「仕事の連絡入ったと言ってたよね。その男から、それとも」

「兵庫の加古川の店からよ」

「まさかジュリ、あなた携帯の番号を教えたんじゃないでしょうね。そんなことしたら危ないこと知っているでしょ」

う」

「なんかあいつ、丹野っていうんだけど、そいつのしゃべりがうまくてついつい教えてしまったのよ。それに先方の連絡にどうしても必要と言われたもんだから」

「全くしょうがないわね。若い女の子は」

手に入れたメールアドレス、番号を男は、関連会社と称する加古川のオーナーに知らせたのである。折り返しそのオーナーと称する男から連絡が来たというわけである。若い男は手配師というわけである。

「その連絡の内容はどうなっているの」

「さっき話したとおり、オーナーシェフでイタリアンレストランを経営していて人手が足りないのですね来てほしいというのよ。給料は二十万円で、食事付きの個室ありだつていうの。休みも週二日保証で、夜行バス代二万円を送るからというの。条件は悪くないと思うけど」

「最初から悪い条件を出すはずがないじゃないの。とにかくもうちょっと考えたら」

「しかし、ずいぶんと手回しがよいというか、話が出来るがっているようですけど」

「そんなの当たり前よ。オーナーシェフと丹野はグルなのよ。歩合制でやっているかもしれないわ。例えば一人頭五

万とかだね。または、組関係でね。この辺はヒバリの縄張りらしいから、その筋の若いもんかもしれないわ」

「そんなことあるんですか」

「先生は表社会で恵まれて過ごしてきたからね。でも、ウラ社会なんてあまり知らないほうがいいと思うけど」

「オーナーからの連絡や送金なんてずいぶん簡単にできるんですね」

小山もそのくらいのことは知っていたが、ジュリの口から具体的に聞きたかったのだ。

「ジュリ、先生に教えてあげて。昔の恩を返す絶好のチャンスよ」

植野は大げさなものである。

「それ簡単です。私が携帯のメールアドレスを男に教えたので、男は私のメールアドレスをオーナーに教えたというわけです。そのアドレス宛に条件などを送ってきたんです。送金も簡単です。銀行口座を教えればパソコンを使って振込みができます。銀行にいかなくてもお金のやり取りは簡単ができます。今回二万円を送るっていう話も、私が兵庫へ行くと言えば、私の口座にすぐ振り込まれます。私がお金を必要とすればコンビニのATMから簡単に引き出せます」

「でもそのお金は簡単に持ち逃げできませんか」

「面が割れているから絶対だめです。顔とか住所、携帯番号のことですが。もし、そんなことしたらどんな目に逢うかわかりません」

「これって巧妙にできている組織じゃない。いったん名前や携帯番号とか知られたら抜け出せないじゃない。危険と思わないの」

「先生の言われるとおりです。でも、逆に組織に逆らわなければ、守ってもらえるということもあるんです。私は組織には属していませんけど私の知り合いの子がそうだったから」

「ところで肝心の話に移りますけど。兵庫の加古川にはどうしても行くんですか」

「ええ、そのつもりです。実は、今夜十二時発、大阪行きの夜行バスを予約してあるんです。大阪からは電車です」

「そう、そこまで決まっていますか」

「ジュリ、すっかりお膳立てができてんじゃないの。本当は止めたほうがいいと思うんだけど。ここまで決まっていると無理かな」

「植野さんの言われるとおりですね。できたら考え直したいと思うんですけど。仕事ならこちらで探せばいくら

でもあると思いますけどね」

「先生やチランママの言うのは最もです。でも、さつきも話したとおり悪い男に引つ掛かってしまっていて、どうしてもこの男から逃げないといけないんです」

「警察に相談するっていうのはどうですか」

「先生、それ無理、無理」

植野とジュリが同時に声を発した。小山もそのとおりだと思った。追いかけてられている証拠もないのに警察は介入しようがないのである。それに、家出中なんていうことが露見したら大変なことになる。また、小山の現在の力ではジュリを保護し、庇うこともできない。若い女の子を、例え教え子と言って突然家に連れていけば家庭争議にもなりかねない。

「とにかくこのままではいけないので、一応、お母さんには連絡してください。また、植野さんと連絡を密にしてもらえると私も安心なのですが」

「先生ありがとうございます。昔の教え子をこんなに心配していただいてうれしいです。でも、母には連絡しても無理だと思います。私はとくに捨てられた子なんですから」

「そうですか。お母さんが無理ならお父さんに連絡するっ

ついてもね」

「わかりました。それでは先生もお元気で」

「先生、私、そこまで送っていくわ」

「植野さん、そうしてください。また戻って来てください。智晴くんは、私の方で預かっていますから」

二人は狭い階段を何やら談笑しながら下りていった。天井に響く靴音が次第に小さくなっていった。小山は突然嵐に襲われ、その嵐があつという間に過ぎ去っていったような思いにとらわれた。小山の日常生活にとっても有り得ないことが現実にあつたのである。呆然としてしまった。

「まだ時間があるんでしょう。こここの3階にあるレストランのコーヒートとケーキがおいしいのよ。寄っていきょう。智晴のこと先生に携帯入れておくわ。三十分ぐらいは面倒見てもらえるわ」

そういうと植野は携帯を取り出し電話をし始めた。ジュリは駅ビルのコンコースの柱に背をもたせ、行き交う人たちの姿を見ることもなく見ていた。土曜日の午後のせいか行き交う人の姿は多かつた。皆ゆっくりと歩いている。都心のターミナルとは違うとジュリは思う。都心ではどんな日でも、どんな時間帯でも人々はせかせかと急ぎ足である。

ていうのはどうですか」

「父、あんな男。父だなんて少しも思っていない。川崎に引越して以来、電話をすることもないし、まして会うなんてことも一切ありませんでしたから。思い出したくもありません」

ジュリの父に対する強い口調に小山も植野も驚いた。小山は、虐待があつたのかもしれないと思った。そして、もうこれ以上は立ち入らないほうがよいと判断した。これ以上立ち入ることは、小山がそれ相当の責任を持つことを覚悟しなければならぬ。その覚悟は、小山にはなかつた。小山は自身を卑怯だと思った。しかし、どうすることもできないのである。

「先生、そろそろお邪魔します。突然うかがったにもかかわらずとても親切にお話を聞いてくださって私本当にうれしいです。会えてよかつたです。チランママにも会えてよかつたわ。これからですか。これから友人に会って、それから新宿にいきます。また会えるといいですね」

「そう、何も力になれなくてごめんね。絶対無理しないですね。危ないと思ったら必ずこちらに戻ってくるんですよ。それと植野さんには必ず連絡してください。大阪に着いたときと、加古川に着いたときにね。できたら仕事の内容に

何かに追われているように見える。都心から小一時間も離れた美ヶ原辺りは、人々の気持ちに余裕があるのだから。

家族連れの姿も多い。ベビーカーを押している若い夫婦が楽しそうに会話をしながらジュリの前をゆっくりと過ぎていった。彼女は、自分にもこのような幸せが訪れるのだろうか、と悲しい気分に襲われた。

「先生がゆっくりして来ていいって。あのいい人よね。うちの子の勉強だつてポランティアよ。時々遠足にも連れていってくれるし、相談にも乗ってくれるし、もう少し若かつたら愛人にしちゃうんだけどね」

植野の言葉にジュリは現実に戻された。

「チランママは先生の好みではないと思うな。もっと落ち着いた口数の少ない人が先生の好みだと思つわ。それにもっとスリムな人よ。私の勤だけど」

「まあ、言ってくれるわね。ところでジュリを追っかけている男ってどんな奴」

「言ってしまうはママシカスツポンね。とにかくしつこくていやらしい奴。それにヒモよ」

「ええっ、最低な奴に引つ掛かつたのね。こういう私も同じようなものだけだね。まあ、とにかく3階に行って休もう。私、喉も渴いたし」

百人ほどの客を収容できるこのレストランはほぼ満席に近かった。それでも入り口近くに二人は席をみつけることができた。このレストランは、サンドウィッチ、カレー、ピザ、パスタなどの食べ物がいっぱい、それにフリードリンクがついて四百五十円という低価格で売っている。値段が安いからといって味が悪いわけではない。それどころから「おいしい」ということで遠方からもお客が来ることで有名な店であった。

「ジュリは何にする。私はパスタとカプチーノにするわ。ちょっと小腹が空いた頃なのよ」

「じゃ私はピザにしようか。二人で食べられるもの。ドリンクはコーク。ノンシユガーのタイプ」

「こっやって二人でいると親子みたいね。いや、姉妹かな」

「姉妹は無理かも。チランママの上の子はいくつ」

「今、高校三年よ。それがあまり学校へ行っていないの。

「ちょっと引きこもり気味なの。難しいわ。女の子がよかつたわ。男の子は何を考えているかさっぱり分かりはしない。大体しゃべらないのよ。聞いても、ウンとか、スンばかりもっと聞こうとすると『うるせえ』でしょう。ジュリはどうだったの、高校生の頃は」

ママに相談したら『あなたが悪い』だって。私、この母親を殺したいとその時思ったわ。父親より憎んだわ。それ以来、五年生の冬休みごろまで話せなくなったの。ママがあいつと別れてから言葉が出るようになったのよ」

「ジュリも苦労したのね。私も男には苦労しているけど、男は肥やしよ。自分を太らす肥やしにするのよ。男は要するに銀行口座の残高を増やしたいのと同じよ。自分の持ち物としての女を増やしたいわけ。それを逆手にとつて、気があるふりをして金を巻き上げるのよ。どうせ人間はだれしも毒を持っている動物よ。毒を出し合つて互いの毒を消し合つてもいるの」

「人は毒を出し合つて生きていくというのは分かるな。でも、毒を表に出しては生きてはいけないんじゃない。結局、毒の出し加減っていう知恵が必要なんじゃない。ママそこが難しいのよ。今、私を追つかけている男も毒持ちね。四十過ぎの風采の上がらない男のくせにプライドだけは強い。その上、自分を相当なイケメンと勘違いしているわ。こっやうとこるがこの男の愚かさであり、毒でもあるの。でも、私もこの男とどっこいどっこいだから笑えないね。この男とは、私が高一の冬休みに付き合ひ始めた男よ。工藤っていう男なんだけど、そいつ私に夢中になつちやうて

「私のここは逆ね。私がママに話したいといつも思つても、ママは『後で』とか『またね』ばかり。ちよつとしつこくすると『うるさいわね』でしょう。だからいつもさびしかったわ。まあ、今になると少しはママの事情が分かるけど。私たち二人を育てるために昼も夜も働いていたからね。それに男がずつといたから。まあ、私が高校一年のとき再婚したんだけど、それが付き合つていた男とは別の男よ。ママの発展家ぶりには驚いたものよ。ママの方が惚れていたみたい。年頃の私が段々邪魔になつてきたのよ。その男も私に色目を使つていたから、ママは心配だつたのかも。高校一年の夏休みにおばあちゃんの所へ遊びに行き、そのままおばあちゃんの所に居ついたわけよ。今まで生きていて本当に私のことを心配し、可愛がつてくれたのはおばあちゃんだけ。後はみんなクソ。そのおばあちゃんも高校二年の時に亡くなって、それ以来、私は寅さんのような流れ者生活よ」

「お父さんがいたでしょう」

「あいつもクソ。チランママにだけいうけど、あいつ私が五年生になる春休みのとき私の体を奪おうとしたのよ。小学五年生になつとすると子どもを私をよ。信じられる。実の父親がこんなことするのかと、すごいショックだつたわ。

とにかく真きたがるわけ。それをいいことにそいつから私三百万せしめて整形したわけ。勿論、そのお金全部使つたわけじゃないけど、とにかく工藤の奴、私の整形顔がまた気に入つたらしく、今度は私に結婚を迫つてきたわけ。四十と十七よ。有り得ないよね。相手はもうジジイよ。私、工藤のこと鬱陶しくてしょうがなかつただけで、やつは三百万円でしょう。すぐには切れなくてずるずる来てしまつた。悪いことに工藤は三百万のうち百万をサラ金から借りているらしいの。とにかく百万円金作れ、ウリをしろのだとうるさいのよ。もうドロドロで、逃げるつきやないと、今、ここにこうしているわけ。私も相当な毒持ちね」

「それであなたこんなにきれいになつたのね。どこを整形したの」

「顔のほとんど全部。鼻も目も口も顎も、それに歯並びもよ。まっ、これは歯科だけだね。なんか毒隠しの面もあるかも」

「私も毒隠しが必要だし、変身願望もあるのよ、痛くなかつた」

「それは痛いけど、美しくなると思つと、あの痛さなんかなんといいことはないわ。今はすこく満足しているけど、またお金が貯まつたら整形しようと思つてんの。部分修正

ね。眉とか、できたら胸も」

「ジュリの胸いい形してるようだけど、それでもやりたいの」

「整形依存症ってあるらしいけど、私もそうなのかもしれない。ちょっとしたことでも我慢できなくなっちゃうのよね。これってもしかしたら中毒かな」

「また毒ね。それで、一ヶ月も逃げていたんだけど、どうやって暮らしてたの」

「そんなの決まってるじゃない。男たちよ。援交。こういっちゃなんだけど、私ぐらいだと男はみんなよるこんで金出すわ。JKという信じちゃって相場より高く買ってくれるのよ。でも、だんだんやばくなってきて、その筋のものからアヤつきそうだったから、この商売は打ち止めよ。なんだって命あつてのもでしょう。なんでも見切りが大仕事よ。それを間違えるとアウトよ。立ちんぼの女だつて今はほとんどあそこ繋がっているっていう話よ。それに毎晩違う男とラブホ泊まりも疲れちゃった。中には変態男もいて、いろんな要求されるし、安眠できないの。もうさすがに体も心も限界よ」

「まさかあんた、ヤクはやってないでしょうね」

「それはやっていない。やったらおしまいよ。すぐボロボ

多いわ。そして、このような流されればなし同士が互いに足を引っ張りっこしているのも現実よ。私たちとヤクザ男たち、ホームレスを襲撃する悪がきたち、不法滞在者を食い物にする零細企業経営者、生活保護者を相手の貧困ビジネス、みんな同じく弱い者同士の食い合い、痛めつけ合いよ」

「なんか悲しい現実ね。私もシングルマザーで二人の子たちを抱え生活が苦しいのよ。でも、役所からお金をもらって何とか生きているわ。もらえるところからもらうのが肝心ね。何も遠慮することはないわ。ジュリも困ったら役所にすがりついたらいいわよ。無理に突っ張ることなんかないわ」

「私、未成年だからだめよ。それに生活保護なんてもらったら身を縛られてどうにもならないわ。私の目標は三十歳までに一億円貯めることよ。男たちから搾り取ってやるの」

「ジュリ、確か未成年でも十六歳以上だったら生活保護の対象になるのよ。あなた十九歳でしょう。でも、役所から親に連絡がいたりでややこしくなるから確かにジュリの言うとおり止めた方がいいわね。ところで、ジュリ本当に兵庫へ行くの。二、三日だったらうち泊めてあげるから

口にされちゃうわ。私ぐらいになると多少は分別がつくけど、そうでもないヤツもいるからね。外人なんかは見境もなく売っているから気を付けたほうがいいわ。だって、中学生も対象にしているっていうから」

「中学生!」

「そうよ。とにかくお金になることなら見境もなくやる連中が多くなって。だいぶ前だけど、八王子のコンビニでアルバイトの高校生を含む四人が射殺されたでしょう。あれだって問答無用にやっちゃっているでしょう。無情な連中よ。何の犯罪もない、真つ白けの世の中は理想だけどそうは行かないでしょう。多少の毒は必要よ。そうでないと面白みはないもの。でも、毒が強すぎちゃうと世の中そのものが壊れちゃうものね」

「子どもは支えになっっているけど、他方で心配事の種でもあるのよね。うちの長男の智雅は引きこもり気味だし、次男の智晴は不登校。その上、犯罪に巻き込まれるようなことになったらたまらないわ」

「でも、人は命さえあれば何とか生きる手立ては生まれて来るものよ。ただ、今までは何とか食べられて来た者でも生きにくくなって来ているのが事実よ。私たちみたいな浮き草も、止まるところがなくて流されればなしというのが

少し考えたら。ジュリのママにも連絡してみるから。ね、是非そうしてよ」

「チランママありがとう。でも、私は決めたのよ。みんな断ち切つて新しい自分になってスタートするには神奈川を抜け出さなくちゃあ。向こうに行つて騙されたと気づいてもいいの。私の生活に裏切りや騙し、見込み違いなんて織り込み済み。結局、他人を頼らず自分の体を使って生きて行かなくちゃならないの。とにかく人生を楽しむとかが、生きがいとかなんて私にはふさわしくないの。最後はお金よ。こいつをしつかり確保してからが私の人生よ。その上、どうせ私は毒を食べ、毒を出しながらこれまで生きてきたんだから、もう恐れるものないわ」

「ジュリは強いね。まるで地獄を生きてきた女のような」
ジュリを見詰める植野の目につつすらと光るものがあった。

「このままジュリを放つておいて植野に任せておいてよ。いのだろつか」と、小山は考え続けていた。知り合いの民生児童委員の北村の顔も浮かべた。彼女ならすぐに駆けつけて相談に乗ってくれるような気がした。しかし、ジュリの加古川行きがその筋の者が絡んでたとしたら小山どこ

ろか、北村にも類が及んでしまうのではないかと恐れた。小山は自身の小心さを笑った。笑ったけど、昔から美ヶ原界隈の実情を知る小山にとってこのことに首を突っ込むのは、それなりの決断と覚悟がいることであつた。現に、斜め向かいの小さなビルの二階で、ヤクザ同士によるとみられる拳銃の撃ち合いがあり、一人が射殺されたばかりであつた。また、駅前ビルの五階では、中国人女性の腐乱死体が発見されたのは半年前のことであつた。小山の教室にも警察官が聞き込みに来た。家庭によつては、「ウツハラ駅界隈は、夜は危ないから近づくな」と子どもたちに言い聞かせているほどである。

しかし、小山にとつてこの美ヶ原は第二の故郷といつてよいほどの愛着を持っている。二十四歳のとき彼は小学校の教員に採用されこの地に赴任した。まだ桑の畑が広がるその中に学校はあつた。学校の屋上からは美ヶ原駅の駅舎の屋根が遠望できたほどであつた。ちょうど日本の高度経済成長期にあたり、東京都心から四、五十分ほどのこの地は、都心や横浜に通勤する人たちのベッドタウンとして急速な発展をした。小山の勤める学校もあれよあれよという間に児童数は増え、一学年のクラスが三クラスから五クラスになるのに三年もかからなかつた。教室は不足し、プレ

ハブ教室は毎年増設されていった。新採用教員も毎年十人近くあり、全校児童は千人を超えていた。職員数も六十人も超えると既設の職員室では収容しきれずに第二職員室が造られた。職員朝の打ち合わせなどにはハンドマイクが使われたほどである。小山の同期採用の男性は四人、その前後の採用を合わせると十人ほどになった。皆独身で、美ヶ原駅界隈のバラック立ての建物の一角にあつた安い居酒屋にはよく通つた。「汚い店」で仲間内でおつた焼き鳥屋のレバ刺は絶品であつた。六十歳ぐらいの女将と手伝いのこれまた年配の女性二人で切り盛りしていた。丸椅子や酒樽を利用した椅子は座り心地は決してよくなかつた。裸電球の薄暗い店は何かおどろおどろしたものがあつた。ソープランド、当時はトルコと称したが、そんな店も十件近くあり、また、ヌード劇場もあつた。夜も八時ごろになると客引きのお兄ちゃんたちが路地のあちこちに立つた。しかし、今はソープランドの数も激減、バラックの飲み屋街も綺麗なビル街に変わってしまった。しかし、数は減つたとは言え、客引きのお兄ちゃんの姿は健在である。

人が年齢を重ねると皺を増すが、街もやはりそんな年輪を思わせるものがある。樹齢を重ね、幹を太らせながらも人間の勝手で枝を詰めら、窮屈そうに立つている踏切の一

本の桜、名前を変えながらしぶとく生き残っているキャバレー、独身のころにはよく利用した銭湯はまだ営業を続けている。キーキ屋のおやじさんの頭髪はほとんどなくなつたが相変わらずおかみさんと店を開いている。店の中には丸椅子がおいてあり、古いなじみの客が店主との会話を楽しんでゐる。人に人柄があるように、街にも街柄というものがあるのは確かかなようだ。小山はそう思う。よそに出かけ、美ヶ原の駅頭に降りるとほっとする。これは自分の故郷以外の何ものでもない、そう小山は確信するのである。それだけに、愛着のある美ヶ原がささくれ立つた人情味の薄い街になつていくのには我慢がならなかつた。

「やはり北村に電話するか」

小山は携帯を開いた。

「先生、それはまずいよ。とにかく引き止めておいてよ。」

外せない用事を済ませたらすぐ駆けつけるから」

北村からは案の定、即座にジユリの行動を止めるという電話であつた。

「今、植野さんと一緒なんです。植野さんはもうすぐ教室に戻つてくると思います」

「じゃあ、私から植野さんに連絡しておきます。植野さんが戻つたら、とにかく行かないように梶山ジユリに電話す

るように伝えてください」

北村の対応は素早かつた。長いこと地区の民生児童委員をしていたこととはあると、小山は感心した。小山が校長で赴任した美ヶ原小学校のPTAの副会長をやつていた。当時から民生児童委員もやつていた。大変面倒見がよく、地域の方々から信頼も受けていた。「美ヶ原の母」などと呼ぶ人もいた。かつて、梶山ジユリの両親のトラブル解決にも奔走してくれたはずだつた。そのこともあり、北村はジユリのことを記憶していたのである。それにしても、十年もの間をおいているにも拘らず、一瞬に思い出す記憶力もたいしたものである、と小山は思った。

「先生、ただいま。智晴がお世話になりました。とにかく大変だつたわ。私もずいぶん考えさせられちゃつた」

小山は植野の話さえざりながら、

「ジユリはどうしたの。もう、新宿へ行つちゃつた」

「どうしたのよ、先生。そんな泡食つちゃつて。何かあつたの」

「実は、民生委員の北村さんに電話したんです。そうしたら彼女、すぐに引き止めてというのよ。私はジユリの携帯番号聞いていなかったからチランちゃんの帰りを待つて

いたとよ。北村さんからチランちゃんに電話があると思
うけど」

小山が言い終わるか、終わらないうちに植野の携帯が
鳴った。

「ジュリとはさつき別れたばかりだけど、これからこっ
ちの友だちと会ってから新宿に行くと言っていたけど。電
話？私が？無理だと思うけど。まあ、いいや。とにかく電
話してみる」

「まったく北村はうるさいんだから。ジュリから叱られるだ
けよ」

掛け終えたばかりの携帯の番号を植野はノロノロと押し
た。

「ジュリ、今どこ。えっ、電車の中。もう一度ウツハラに
戻ってきてよ。大事な話があるって北村のおばさんから連
絡が入ったのよ。ジュリ五年の時、同じクラスにいた順治
のお母さんよ。PTA役員していて民生委員もやっていた
でしょう。思いだした。そのおばさんよ。心配しているん
だって。あんた、どうせ時間はたっぷりあるんでしょ。

柿沼で降りたらウツハラまで二十分もかからないでしょ。
先生ももう一度ジュリの顔を見たいんだって。駅ビルの葵
のステーキご馳走してくれるとか言っているわ」

は止めた。それほどのことかと言いつつのは見苦しいと分
かった。男たちに食いものにされ、ずたずたにされるかも
しれない若い教え子の饑にしては安いとも考えたのである。
「ところでチランちゃん、北村さんのことはよく知ってい
るの」

「ええ、いろいろ世話になっているのよ。子どもも含めて
ね。彼女、面倒見はよいが干渉し過ぎなのよね。うるさ
くって。それに」

「それになんですか」

「北村には貸しがあるから断れないのよ」

植野はだれに言つてもなく独りごちた。植野は、生活保
護を受けていることを小山には話していなかった。しかし、
そんなことはすぐに知れる。小山には、かつてこの地域の
小学校の校長をしてこともあって、いろいろ情報を伝えて
くれる者が多かった。小山が学習支援の教室を開いたこと
もあつたという間に知れ渡り、入室申し込みを断わるほど
あつた。地域の情報をもたらしてくれる一人が北村でも
あつた。北村とは、以前、PTAの役員をしていたことも
あり、ときどき会っていた。植野の子が学習支援の教室に
きていることは小山から北村には伝えてあつた。植野は、
かつて生活保護の申請などで北村に世話になっていた。植

電車の中には話が長い。今どきの若者たちはこうい
うことには平気なのだろうか。それにしても植野の言い方
は勝手だと思つた。

「ステーキのご馳走なんて無理ですよ」

傍から小山は植野に念を押した。

「ジュリ、戻って来るってよ。タイ・エビね」

「なに、それ」

「海老で鯛を釣るってあるでしょう。今のは逆、鯛で海老
を釣るわけよ。ジュリ、見事にステーキに引つ掛かったわ
け。先生、心配することはないわ。ステーキなんか食べて
いる暇なんかありませんわ」

「そんな言い方じゃジュリが可哀想ですよ。いかにもジュ
リが安っぽいということでしょう。それに、葵のステーキ
はダイナーになると結構な値段ですよ。一人最低三千元は
するでしょう」

「まあ、北村の話は簡単に済むと思えますから、そしたら
すぐにジュリを帰せばいいことよ。先生、退職金まだいっ
ぱいあるんでしょ。ケチケチしないことよ。そんなときは
そんなとき、先生も男なんだから教え子によいところを見せ
なげや。嘘ついたらいけないわ」

「おい、おい、嘘はそっちだろう」と反論しかかつて小山

野は、民生児童委員北村の担当であつた。転居をしたため、
植野は北村の担当を外れたのである。植野にすれば北村に
は何から何までも知られており、煙たい存在であることは
確かなのであつた。

「トントン、というドアを叩く音がすると、

「先生、入るわよ」

と言つて、北村が部屋に入つて来た。相変わらずの屈託
のない声である。

「ジュリが来たって本当なの」

「そうなんです。私もびっくりしました。偶然イトヨで
植野さんと遭つたというんです。ジュリちゃんから植野さ
んに声を掛けてきたんですよ」

「そうなのよ。彼女から声を掛けられなかつたら分かん
なかつたわ。北村さんも会つたらびっくりすると思つわ。子
どもの頃は月とスッポンよ」

「雲泥の差ね」

北村が相槌を打つ。

「それで彼女、家を出してるといふけどこれも本当なの」
「最初は本当とは思えなかつたけど、先生と話を聞いてい
るうちにその通りだとわかつたのよ。それと、まだ先生に
は話してないけど、彼女のママの有里に電話をしたのよ。」

そうしたらなんと、あっそお、だって。びっくりしたわ。有里は家出したことすら分かっていないのよ。むしろ娘の家出なんていう考えは持ち合わせていないのよ」

「それで有里にはジュリが兵庫へ行くことを話したの」

「それよ。そんな話まで行く前に、ジュリがヤバイ状況だから今回は迎えに来たほうがよい、と話したのよ。そしてらなんて答えたと思います。チランあなたに任すからってこのよ。話にならないわよ」

「これじゃ娘が家出するわけだよ。それにしても有里はどうしちゃったのだろうねえ。昔はずいぶんと子どもを可愛がっていたんだけど」

北村は遠い目で窓の外に目をやった。高く、薄青い空がすっかり透明感を増している。うろこ雲がいく筋もきれいにその空を走っている。窓から入る風も爽やかで気持ちがいい。もう、すっかり秋である。黙っていてもたらたらと汗が流れてくる猛暑続きがついこの間までだったのに季節のめぐりは確かである。

「子どもは一人では変わらないわ。親が変わるときめに子に影響するのね」

北村の顔が一瞬沈んだように小山には見えた。

その時、ドアを小さく叩く音がした。室内の三人は一瞬

顔を見合わせた。

「すみません、ジュリです。また来ました」

三人はやはり、というような顔をして頷きあった。

「どうぞ、入ってください。待ってましたよ」

小山は大きく、明るい声で応えた。

ジュリはおずおずと緊張した面持ちで入って来た。

「ジュリ、あなたなの。ずいぶん変わったわね。おばさん驚いちゃった。ごめん、悪い意味で言っているのじゃないのよ。あなたがとてもきれいな女の子になっているという意味なの。私のこと覚えてる」

「ええ、北村のおばさんでしょう。順治くんのお母さんの順治くんは元気ですか」

「順治はなんとか引つ掛かって、今大学に行ってるわ。スキューバダイビングクラブに入って楽しくやっているみたい」

「うわあ、うらやましいなあ。海の中はきれいなんでしょねえ。私も潜ってみたいわ。順ちゃん元気そうよ良かったわ」

同級生だった北村の息子の話がきっかけで、ジュリの緊張がほぐれたようだった。

「また戻って来てくれてありがとう。ジュリちゃんが帰っ

た後にいろいろ考えたんですよ。どうしても心配になってね。それで北村さんに相談したわけです。北村さんはジュリちゃんが小学生だった頃のことやあなたのお母さんのこともよく知っているんでね。それに、民生児童委員で地域で困っている家庭や子どもさんたちの相談をされているので、ジュリちゃんのことについても何か良い知恵をだしてくれるんじゃないかと思ってね。まあ、とにかく座ってください」

小山はそう言ってジュリに椅子を勧めた。そして台所へ飲み物を取りに行った。

「あなた、家出中なんだって。今、植野さんから聞いたんだけど。そりやまずいよ」

いつものことだったが、北村の話は単刀直入である。「あなたのような若くてきれいな子が家出していると知ったら、男が放っておかないでしょう。若い子が殺される事件が続いているでしょう。危ないことはよしたほうがいいわよ」

北村の語調は穏やかではあったが、言っている内容は、傍らの者がどきどきするほど露骨なもの言いであった。

「おばさん、ありがとう。でも、私決めてんです。自分で生きていくんだって」

ジュリは北村の話に特に反発するでもなく、やはり静かな物言いで答えた。

「それは立派な考えよ。しかし、生きていく術、方法ね」

それがしつかりあることが前提でしょう。悪いけど、今のジュリには何があるの。後ろ盾になってくれるしつかりした大人もいないでしょう」

「私、大人は信用していません。大人は私たちみたいな若い子をしゃぶりつくすか金儲けに利用するだけです。世の中は毒だらけですから」

「そりや、あなたが今まで付き合ってきた男たちのことよ。そういう男ばかりではないわよ。ここにいる先生も男よ。あなたを利用しようとした。利用どころかあなたのことを心配して私に電話までくれたじゃない。世の中を悪い方にだけ取っっちゃいけないよ」

「ジュリ、私も今ままでずいぶん悪い男に引つ掛かってきたけど、北村のおばさんの言うとおりよ。悪い人だけじゃないわ、この世の中は」

「でもチランママ、付き合ってきた男から搾り取られるだけだった。チランママも搾り取ったんじゃない。勝負は五分五分で良しとする、って言うじゃない。それに勝負に決断が必要よ。私みたいな学歴も親のバックもない者にとっ

ては若さだけが武器よ。若さはせいぜい三十歳までよ。この十年でその後の私の生活基盤を作んなきゃならないの。おばさんたちの言っていることは、黙って静かに、しかも平凡に生きなさいってことでしょう」

「人生では平凡が一番なのよ。このことは人生を重ねないと分らないことだけどね」

「北村のおばさんの言っていることは私には納得いかないわ。平凡に生きられる選択肢がある人はいいけど、今の私にはそんな選択肢はないわ。平凡に何をすればよいの」

「まず生活基盤を作ること。仕事を見つけてよ。それで初めて生活のリズムが出来上がるわけ。そのスタートができるよう私も応援するわ。社会は努力する者に手を差し伸ばしてくれるわ。花も実もあるのが世の中よ」

「そつそつ、若いんだから仕事なんていくらでもあると思うわ。私も応援する」

植野はようやく正解を得たように笑顔で応えた。

「ママ、ほくお腹が空いて来ちゃった。もう帰ろうよ」

それまで静かにゲームをしたり、コミック雑誌を読んでいた智晴が声を上げた。

「そつだね、今日は一生懸命勉強したし、じつと今まで静かに過ごしていたんだから疲れてしまったよね」

ジュリはぼつりと言った。

「ジュリのママだって本当はあなたのことを心配していると思うよ」

「おばさんは全然分かっていないね。うちの親なんてそんなタマじゃないわ。自分が一番で次が彼氏よ。子どものことなんてついでよ。私なんかついでどころか全くの無視よ、いやそれ以上ね。完全な邪魔者よ。だからこそ私は自分しか頼れないし、今回のことも自分で決めたのよ」

「しかし、くどいようだけど兵庫の仕事ってまやかしだと思っわ。おそらく、体を売るかそれに近い商売のような気がしてならないわ」

「でもね、おばさん。体売る商売というけど私みたいな女の子にとっては結構な仕事なのよ。立ちんぼの子のような場合、変な男に絡まれたりした場合はみんな自分で対処しなきゃならないけど、店の場合はそんな心配はないわ。第一、今どき体を売る商売なんてそんなに珍しいことじゃないでしょう。AV女優だっていくらでも本番しているでしょう。そのことで直接お金のやり取りがなくても出演料という形で結局お金で始末をつけているじゃない。これって売春と変わらないじゃない。AV女優がよくてソープの女の子が悪いというのは計算が合わないんじゃない」

小山は気の毒そつに智晴を見ながら言った。

「ごめんごめん、ママうつかりしていたわ。この子、食が細いもんだからお昼ご飯をわずかしが食べていないのよ。それでいつも三時のおやつを上げているのよ。お腹って正確で正直ね。じゃ、悪いけど私帰りますね。もし都合がついたら戻りますけど。ジュリちゃん、北村さんや先生の意見をじっくり聞いて納得のいく決断をしてちょうだいね。もし、加古川に行くようになったら必ず電話してね。先生、北村さん、お先に失礼します」

「じゃあ気をつけてね。智晴くん、今度はあさつてだね」

「じゃあ、後で連絡するね。気をつけて」

小山と北村は、椅子から立ち上がった植野に声を掛けた。「チランママありがとつ。本当にお世話になりました。でも会えてとてもうれしかったわ。また会えるといいね」

「さよなら」

ジュリに向かってそつ言いながら植野は智晴の手を引きながら部屋を出て行った。階段を降りる二人の靴音ともに智晴の母親に甘える声が狭い階段の天井に響いていた。植野が去った部屋は、植野が占めていた空間がそのまま持っていていかれてしまったような空虚感が漂っていた。

「甘えられるママを持って智晴くんは幸せね」

「しかし、AV女優は、映画という架空の世界での演技じゃない。必ずしもセックスだけじゃないじゃない。ストリーがあってそこで演技をしているわけだから、その演技に対しての金銭じゃない。ソープランドの場合は、最初から最後までセックスという快楽を満たすことではないのよ。AVとはそこが違うと思うな」

「それ全然違う。AVだって男のセックス願望を満たすためのものよ。結局男の欲望を満たすことでは同じでしょう。それにソープの女全部がセックスするなんてありっこないわ。」

「AVは映像という画面をとおしてで、直接じゃないでしょう。ソープは女が直接男に接して性的サービスをするわけじゃない。やっぱり違うでしょうよ。先生はどう思います」

「なんだかジュリちゃんに説得されちゃいそうだけど、やはりAVとソープのような接客商売とは違うと思いますね。ジュリちゃんはソープは安全みたいなこと言ってますが、いろんな面で心配ですよ。まず感染症などの病気が移される心配ですね。また、店のオーナーなどが悪い客から守ってくれるといいますけど、店のオーナーや店員自身がワルということだってたくさんあるわけでしょう。さらに

精神的にどうでしょうか。仕事に対する誇りを持てますかね。むしろいつも後ろめたい気持ちを持ってしまふことだつてあるんじゃないですか。それに、もし自分に子どもが生まれたとして、その子に自分の仕事を誇れますか。とにかく不特定多数の男を相手にするわけですから想定外の出来事がいつも考えられますね。やはりやめた方がよいと思いますね」

「お二人のおっしゃっていることは私にも理解できます。しかし、どんな仕事だつてリスクはありますよ。また、自分が置かれた環境というのも判断基準になると思います。何回も言いますが、私みたいにだれも頼れる人がいなく、手に職もなく、とにかく食べていかなきゃならない若い女には、収入がどれほどかということが一番の選択基準なのです。仕事は選ばなきゃたくさんあるといえます。その通りです。しかし、アルバイトなどのような非正規社員で月の収入いくらだと思えます。せいぜい十五万円ぐらいですよ。ここからアパート代、光熱費、食事代、被服代、交通費を支払つたらどうなります。百パーセント赤字です。この給料水準は親元から通勤するという前提で成り立っているんですよ。私のような親がないも同然の女にとっては無理な話です。元々食うだけの生活なんて私には我慢でき

ないです。できたらお金に困らない生活をしたいと思っています。それにはまずお金が少しでも貯められるような仕事でなければいけないんです。幸い、今回紹介を受けた仕事は、寮付きで給料も二十万円保証してくれるというから今の自分がこの境遇から脱出できるスタートにはなると思えます。お二人とも騙されていると心配してくれませんが、とにかく行つてみないことには始まりません。万一、話と違つていてもいいんです。とにかくここを脱出しないと本当に身が危ないんですから。少なくとも加古川では殺される心配はありませんからね」

「あなたの話を聞いてみると半端じゃない状況だということとは分かるけど、人身売買のようなあくどいことではないいいんだけど。それが心配よ」

「北村さんが言われるように、ニュースで女性を食い物にしている組織が摘発されたなどということもありますからね」

小山は眉をしかめながら言った。

「鉄格子に監禁して商売をやらせるなんて、ほとんど映画や小説の世界ですよ。懲役や多額の追徴税を覚悟してやるほどのものではありませんよ、先生。今は近代化といふのがある、もっと合理的に商売のシステムができていますよ。

もし、万一危険なことが分かつたら警察に駆け込めばいいんですから、それほど心配はありません」

北村、小山の話のトーンが段々沈んで行く。ジュリの話を肯定しているわけではないが、現実には彼女の窮状を救う手立てはないのである。彼らの家庭を犠牲にしてまでとはとても決断はできなかった。また、ジュリの、彼女なりの計画・計算がしっかりしているように思えたのも一つの安心材料だったのかもしれない。

「それほどあなたの覚悟があるならおばさん止めないわ。でもね、向こうに着いたら必ず連絡してちょうだい。そして、万一危ない仕事だつたら必ず戻つておいで。そのときには何かうまい方法を考えるからね。このことだけは約束して頂戴」

「うん、分かった。きつとそうする」

「じゃあ、話が終わったところでジュリちゃんの壮行会をやりませんか。そろそろ五時になりますから、ステーキ屋も開店する時刻です。せつかくですから植野さんにも連絡して来ていただきますし。賑やかな方がいいでしょう。北村さんのご都合は」

「私、一度家に戻ります。急いで夕飯の仕度をして来ますよ」

「それじゃ六時集合にしましょう。どうジュリちゃん」「あつ、すみません。気を遣つていただいて。でも本当にうれしいわ。ありがとうございます」

ジュリは、少しほっとしたような表情を見せながら言った。続いていた緊張がほぐれたのか火照つていたような顔色が透けるような白さに変わつていた。

途中、とげとげしい雰囲気も生まれかけたが、最後はなんとか穏やかに終わり、小山はほっとした。と同時に、ジュリの生い立ちのすさまじさに驚かざるを得なかった。

十九歳と言えば世の中にも親にも甘えて他人任せの生き方をしていく子が多い。それに対し、ジュリは辛酸を舐めつくしてきたせいか自分に対しても世の中に対しても厳しい生い立ちという環境が彼女を作つて来たのは間違いないと、小山は改めて思うのであった。そして、清楚とも思える彼女の横顔をまじまじと見詰めた。その強い視線を感じたのだらう、ジュリが小山の方に振り向き、

「先生、私の顔に何かついてます」

と、表情を緩めて言った。

「ジュリちゃんってきれいだなあ、と思つてつい見とれてしまった」

言った瞬間、小山は自分の顔が赤くなつていくのが分か

り、さらにどきまぎとしてしまった。特に意味はないんですよ。気に障ったら許してね」「いや先生、そんな気に障ることなんてちつともありません。逆にうれいだけです。今まで男のおべっかはずいぶんもらいましたけど、先生のように純粹に私の顔を褒めてくださる方なんてなかったわ。先生の今の言葉大事にします」

「いやあ、ありがとつ。私こそ感謝するよ。ジュリちゃんって芯の優しい子なんだね。私の言葉を大事にする以上あなた自身を大事にして生きていってくださいね」

こくりとわずいたジュリの目がじわりと膨れていった。翌日、ジュリから植野に「大阪になんとか着いた」という電話があった。そこから電車に乗り換えて加古川まで行くの到手間取ったらしいが、お昼ごろにはどうやら無事着いたという。それを聞いた小山も北村も胸を撫で下ろした。

それから二日後、智晴の学習支援の日であった。北村にも都合をつけてもらい、小山の教室へ寄ってもらった。この日も抜けるような秋の空であった。爽やかな風が吹き渡っている。乾ききった空気を通過してくる日差しが痛いくらいであった。

「とにかくよかつたね。無事着いて」

北村は教室のドアを開けるや否や言った。

「本当によかつたですね」

植野と小山が同時に答えた。そしてひとしきりジュリの話でもちきりになった。雇い主はよい人なのか、同僚たちにはいじめられないかとか、仕事には早く慣れてほしいなどとまるで身内を心配するような会話であった。

ところがその三日後、植野がジュリに電話をする、事態は心配したとおりになっていた。案の定、仕事はレストランの店員などではなく、ソープの仕事であるというのであった。植野は「断わってすぐ帰ってきなさい」と強く言ったのだったが無駄だった。ジュリ自身がこの仕事は初めてではなく、それだけに抵抗感が薄かったのである。また、例え帰りたくても交通費に相当するお金を持ち合わせていなかったのである。さらに植野が「先生たちと相談してお金を送るから」というと、「私は覚悟を決めてここに来た」と答えたというのである。植野からその話を聞いた小山と北村は溜息をつくだけであった。「とにかく連絡だけは絶やさないようにしよう」ということで三人は合意し、様子を見ることにした。しかし、事態はそう甘くはなかった。翌日、植野が三人で相談した結果を伝えようとしたところ、彼女の電話は不通になっていた。幾度かけても「現

在、この電話番号は使用されていません」と応えるだけであつたのである。店の所在地は兵庫県の加古川市というだけである。店の名前も知らせてもらっていない。実際に、ジュリが加古川市内にいるかどうかも定かではないのである。このような曖昧模糊とした内容で、事件として警察に届けるわけにはいかない。その上、三人は彼女の身内でもなんでもないのである。無力感だけが三人を襲った。

「連絡が取れないだけで、ジュリがどうなったというわけでもないでしょう。彼女のことからきつとなんとか遅しく生きていくと思うわ」

植野の言葉に他の二人はさすがのような思いを持った。確かに二十歳に満たない彼女ではあつたが、彼女の生活力やものの考え方は、海千山千の四十女にも負けないところがあつたからである。

「しかし、どうして携帯が通じなくなったのかしら」

北村の問いに

「それは、ジュリちゃんが自ら携帯を替えたか取り上げられたかのどつちかだと思いますね。とにかく外部との連絡を遮断し、搾り取るのがこつという商売の常套手段と聞いていますから。ひどい目にあつてないといいですね」

小山は眉をひそめながら答えた。

「やはりあのときなんとしても止めるべきだつたわね。ジュリの弁舌についていけるめられちゃつた。まだ私は人生経験が浅いね」

「いや、そんなことありませんよ。結局私たちは打つ手がなかつたんですよ。だれにも責任はありませんよ」

小山はそれだけを答えると、溜息をついた。

同じ澄んだ秋の空の下に、人々はさまざまな事情を抱えて生きている。死を今まさに迎えようとしている人もいれば、産声を上げこの世に生を受けようという命もある。人はよく「命は支え合つて生きている」というが、ある時点では命はその個の力に頼らざるを得ない。それを天命と呼ぶ人もいる。しかし、それはあくまでも「私の力」である。むしろ「私命」とも言うべきではないか。ジュリにこの間接して小山そうは思うのである。そうでなければジュリに救いはないように思うからである。「私命」というものを信じれば、ジュリの救われる道は見つかるように思うのである。

「とにかくこうなつたらジュリからの連絡を待つ以外ないわね」

北村の断定的な言葉は、一つの区切りになった。時間の経過とともに三人の間では、ジュリの話が少しずつ少な

くくなって来、いつしか全く話題にも上らなくなっていた。ジュリが去ってから丸二年が経っていた。

小山は学習支援教室をNPO組織にし、事業を拡大していった。名前も「県央学習支援センター」と変えた。専任スタッフを一人雇い、非常勤やボランティアの協力者は六名にも上った。通室している子どもたちは中学生が八名、小学生が十二名になり、その上、数名の高校生も通うようになっていた。教室も下の階がちょうど空いたのを機会に借用した。月謝の安さや北村の熱心さも伝わってか、二駅を乗り換えて通う中学生もいた。北村は、学校現場におけるいじめや不登校の底知れない広がり恐怖さえ覚えた。同時に、この仕事の重要性を痛感し、没頭していった。智晴は五年生になっていた。夏休みを過ぎ、再びの秋を迎えても不登校の改善は見られなかった。その分なのであるつか、小山の支援センターに通う回数が増えていった。植野も息子が支援センターに親しみをもち、通う回数が増えたことを喜び、支援センターへの協力を惜しまなかった。十二月の半ばも過ぎ、支援センターではクリスマス会の準備に忙しくしていた。そんな矢先のことであつた。植野から電話があつた。

「先生、大変よ。ジュリから電話があつて明後日ウツハラしてそんなことになつたでしようか」

「二十一歳で結婚はそんなに早いわではないわ。私なんて十八だつたからね。それよりよもその結婚が問題よ。男に騙されてんじゃないかなと心配よ。レストランのはずが風俗だつたでしょう。ジュリのやることは危なかつかしくないががないわ。結婚相手がどんな男かはつきり分らないんだけど、どうも年寄りみたいだわ。やっぱり騙されてんだわよ。ああ、心配」

「ところでジュリは明後日の何時ごろ来るんですか」

「それがどうやらもうこちらに来ているみたいなんですよ。明日一日はこちらの友人に会つたり、ショッピングをするらしいの。それを済ませてからウツハラに来るんだつて。こちらの都合に合わせてつていうのよ。忙しい先生と北村さんに時間が合えばいいんですけど」

「ええと明後日は金曜日ですから午後からでしたら何とかやり繰りできますね。北村さんはどうでしょうか」

「北村さんも金曜日の午後一時から二時間ほど都合がつくと言っていました。これでよかつた。私から連絡しておきます」

「彼女の携帯はつながらなかつたですよ」

「そう、そう。実はやはり携帯を取り上げられたらいいの

に来るんだつて」

「本当、元氣だつたんだ彼女。いやあよかつた。安心、安心。早速北村さんにも伝えなきゃ。チランちゃんお願いできる」

「了解よ。それで詳しいことを話さなきゃならないんで、これから先生のところに伺います。北村さんの都合がよければ一緒に伺います。四時ごろがいいんですね。分かりました。それで」

小山は呆然としてしまった。ほとんど忘れかけていたジュリが突然目の前に現れようとしていたのである。どんな姿で現れるのだろうか。やはり、最初にこの部屋に現れたときのように途方にくれた姿でくるのだろうか。小山にはそんなうらぶれた姿しか思い浮かばなかつた。

植野は時間きつかりに来た。あいにく北村は予定が入つており、来られないという。

「それでジュリはどんな用事で来るの」

小山は、聞きたくてうずうずしていたことだつた。

「それが先生、どうやら彼女結婚をするらしいのよ。その結婚式に私たちに参加してほしいらしいの。そのお願いに来るといふのよ」

「えっ、結婚。まさか、彼女まだ二十一歳でしょう。どう

よ。しばらくして新しいのをくれたらいいけど。しかし、

内臓メモリーのコピーは許されなく、当然私たちにも連絡できなかつたわけね。店のオーナーがジュリを過去から断ち切るためにやつた、とジュリは言つてますけど、実際はジュリに逃げられないためですよ。しかし、結婚式への参列依頼のためにどうしても携帯番号を知る必要に迫られたの。それで疎遠にしていた母親に電話をして聞いたということですよ。イエデンの番号を知つていてよかつたと思います」

「それにしてものんきですよ。こちらがとても心配していただからもう少し早くに無事の連絡をしてくれてもよさそうなんですよ。彼女と別れてちょうど二年、変わったでしょうね。なんか会つのが怖いような気がしますね」

「あら、先生。ずいぶんと弱気じゃありませんか。確かに若い女の子の二年は私たちのようなおばさんの二年とは段違いだから。まして風俗でしょう、彼女の仕事。彼女、荒れていないといいけど」

「荒れているつてどういふことですか」

「精神的なこともあるけど体がぼろぼろになっているといふことですよ。なにしろ不規則な生活で昼夜逆転でしょう。

肌は荒れるし、栄養のバランスも崩れて変に痩せたりするのよね。何よりも外人も含めいるんな男と接するから。もちろん、まともでない男もいますから半端な気持ちでは務まらないので必然、男勝りというか、やくざっぽくなるというか粗々しくなるのよね」

「そうすると、似た者同士という言葉があるようにまともな男ではない可能性があるんですね」

「そう思います。とにかく明後日一時、先生のところでということでもいいですね」

植野はジュリに会うことがとても楽しみであると同時に、不安でもあるようだった。肩を落とし加減に部屋を出ていくように小山には見えた。

小山は、改めて二年前にこの部屋を出て行ったときのジュリの姿を思い出した。あの時は、側にいた三人が寄ってたかってジュリを引き止めようとしていた。少なくともジュリはそう理解したに違いない。若さもあって、ジュリは余計に反発し、兵庫行きを強行したのかもしれない。そう思うと小山はジュリに対し申し訳ない気持ちにもなった。

植野がいうように、小山は、この二年でジュリはけばけばしいいかにも風俗の女というようになってしまっているのではないかと懸念するのだった。しかし、他方での清楚

な感じのジュリであってほしいと淡い期待も寄せるのであった。

小山が経営する学習支援センターが県認可の非営利団体となつて、県に提出する書類始め案内書やスタッフへの教育など、小山の仕事は急増していた。その上、様々な団体から、いじめや不登校の問題についての講演などの依頼も以前より増えた。そんな状況なのでジュリが訪れる金曜日があつたという間に来てしまった。

「全く驚きね、先生。今どきの若い子のやることにはとてもついてはいけないわ。二年前に別れたばかりのジュリが、今度は結婚の報告で来るといふんでしょ。相手は堅気の人だつたらいいですけど。なんだか心配ね」

「北村さんが心配されていることは、私も心配していたんですよ。仕事に差別をするわけではありませんが、なんたつてああいう商売でしょう。どうしても悪いほうに想像してしまいますよ。とにかく健康でまともな仕事をしている人であればいいと思うんです。それに世の中というのは得てして悪いことだけじゃありませんものね」

二人はやはりジュリのことがか心配でならなかったのである。ちょうどそんな会話をしているときだった。

ドアをノックする音がした。

「先生来たわよ。緊張ね」

北村がおどけた顔で言つ。

「ようね」

小山が心えると、植野の声であった。

「植野さん、なんか気取つてんじゃない。いつもだったらすぐにドアを開けて入つて来るのにね」

小山も思わず苦笑いをする。

「ごめん、遅くなつていない。ジュリつたらお化粧に時間がかかつて。さあ、入りなさいよ」

部屋に入るや否や植野はいつもの植野に戻っていた。

「すいません。また、突然邪魔しまして」

そう言いながら部屋に入つて来たジュリを見た北村と小山は驚きの表情を隠せなかった。ジュリの美しさにさらに磨きがかかっていたのである。まるでファッション雑誌から抜け出てきたようなのである。栗毛色ストレートの髪を肩のあたりまで伸ばしている。それが細面の顔をさらに小さく見せている。抑えた化粧が元々肌理の細かい白い肌を一層白く見せ、上質な白磁のような光沢を発している。エンジ色のワンピースはゆつたりとしたフレームがある。季節には早いワインカラーのブーツがミニスカートによく映

えている。何よりもすらりと伸びた下肢がぞくぞくするほど美しい。手の指には高価そうなダイヤのリングがはめてあり、ネックレスのダイヤと対になっている。バッグも明らかにブランドものである。「まるで掃き溜めに鶴」だと小山は思った。

「あんだ一体どうしたの。こんなに豪華な服や指輪、それに高級なバッグを持って。若い女の子にはとても買えない品物でしょう」

「いろいろありましたよ、私、玉の輿に乗つたみたい」

「玉の輿つて、一体どんな男の輿よ」

「うーん、話すとき長くなるんだけど、彼氏がお金持ちの社長というだけのことよ。安藤誠っていうの。二人のときは誠と呼んでいるのよ。彼がそう呼んでほしいっていうから」

北村の遠慮のない問いかけにジュリは何の抵抗もなくすらすらと答える。

「それだけじゃ雲を掴むような話と同じじゃない。何歳でどんな仕事をしているの。それにまさか既婚者じゃないでしょうね」

「それは大丈夫。結婚はしていたけど死別なのよ」

「死別」

「そう、実は阪神・淡路大震災で奥さんと子どもさんを亡くされたんだって。それ以来ずっと独身を通してきたのよ。神戸に住んでいたの。長田地区というところ。家族も家も仕事も失くし、一時は絶望的になり飲んだくれの生活が続いたらしいわ。でも、ある日、避難所に毎日花を飾りに来てきてくれるおばあちゃんに会って、生活を変えたらしいの。おばあちゃんに、なんで花なんて毎日飾るんだって、聞いたんだって。そしたらそのおばあちゃんが、花はお腹の足しにはならないけど心の飢えを少しは満たしてくれる、って言ったんだって。その言葉に打たれるものがあって、それまでの自堕落な生活に終止符を打ったの。そして、震災までやってきた不動産業から花屋を始めたのよ。それも一坪あるかなしかの店舗で。当然値段は他の店の半額ちかく。これが当たりいまではチェーン店が百店舗以上になっっているわ。それに今では薄利多売の店舗と差別化した高級品扱いの店が三十店舗あるの。事業は順調に伸びているのよ。それに昔の不動産関係の伝手で、そちらへの投資もしているみたいなの。大震災の復興事業でこれも大当たりしたらしい。その後のリーマンショックでかなり損をしたらしいけど、今はまた順調に利益を上げて損を取り返し、利益が出ているらしいわ。年齢ね、それは・・・」

を持ち、子どもを育てたいの。彼もそのことを強く望んでいるの。私は変わるのよ。変わらなくちゃいけないの」「いやあ、本当に変わりましたねえ。人ってこんなに変わるんですわ。諦めちゃいけないということを改めて知りました。ジュリちゃんのことを悪く言っているわけじゃありませんよ」

小中学生を相手にしている小山にとって、学習や素行で匙を投げてしまいたくなるような子どもたちはたびたび会っている。それだけにジュリの変化は、小山の教育観に大きな影響を与えたと行ってよいのである。子どもは成長し、変わるのだ。決して絶望してはならないと。

「それにみなさんにとってはもっと驚くことがあります。特に先生にとってはね」

「えっ、もうこれ以上驚かさないでよ、ジュリちゃん」
植野が大げさに手を広げて言う。

「何よ。早く言って」
北村がせかす

「実は、私、大検の資格を取るための通信教育を受けているのよ。経営学の勉強をして彼の事業の手助けをしたいの。そのためには大学に入って勉強したほうがよいと思ったのよ。実は私、高校中退だったのよ。そんな時は高校なんてど

ジュリは言いよんだ。そして、意を決したようにして、
「六十歳よ、還暦のおじいさん。でも見たとこ四十歳くらいかな。とても若く見えるのよ。私と連れ立って歩いていても、少し離れた夫婦とか恋人同士にしか見えないうた
い」

「六十歳、それじゃ先生とあまり変わらないじゃない。大丈夫なのかね」

「四十歳も歳の差があるじゃない。今はいいけど後十年もしたら彼は七十、あなたはまた三十よ。とても持たないと思うね」

北村の言葉に植野が重ねる。

「でも、今、二人は愛し合っているのよ。だから心配は何もないのよ」

「愛し合っている」

北村は驚きの声を上げる。小山にしても植野にしてもそれは同様であった。二年前の二ヒルとも、また社会を憎悪しているともみえたジュリからこのような「愛」という言葉が聞かれるのは青天の霹靂に等しかった。

「そうよ。愛し合っているの。私は彼と出会って本当に愛されることのうれしさを知ったのよ。それにこれまでの不幸を取り返さなくちゃって思ったのよ。そのためには家庭

うでもよかったし、その後もそう思っていたわ。でも神戸に行ってから考えが変わったの」

「えっ、兵庫の加古川市ではなかったの」

「最初の三か月間はね。その後すぐに神戸に回されたのよ。私ならもつと稼げるということ。もちろん、私の収入も増えたわ。神戸は国際都市よ。いろんな国の男を相手にしたわ。外国人の多くは、日本のソーブランド、天国だつてべた褒めよ。それに人種差別はしないでしょ。だからリピーターが多いの。これ本題と違うわね。とにかく、ここでたくさんの人生勉強をさせてもらつたわ。その一つが言葉ね。どんな片言交じりでもその相手の男の国の言葉を使うととても喜んでくれたのよ。そして、こんな私たちの風俗の世界でも外国語が必要になってきているのを実感したわ。今更何か国語も覚えられないから、そのうちのひとつとしたらやはり英語ね。この英語の勉強もやりたいのよ。誠もこのことは大賛成で学費も全部出してくれるって言うているわ。結婚して子どもをつくるの。子どもは世界に通じるような子に育てたいのよ。日本だけで生活していきながらあり得ないわ。やはりグローバルな生き方をしなきゃ。そのためにも外国語は必修よ」

「ジュリ、あなたは本当に成長したわ。驚きよ。グローバ

ルなんていう難しい言葉をあなたから聞くなんて思いもしなかったわ。ところで今もソープで働いているの」

「チランママ、まさか。実は神戸に移ってから一か月後に誠と会ったのよ。それから彼三日とおかずに通う常連客になつてくれて、その二か月後にはこの仕事から足を洗つて誠の世話になつたというわけ。この世界では円満に足を洗うにはいろいろ厄介なことがあるけど、彼、不動産関係者たちと昵懇だから、その筋のオーナーとうまくお金で解決してくれたの。その後、マンションを買ってくれてお小遣いをもらっているの」

「お小遣いつていくらぐらいなの」

「そのときによるけど大体月五十万ぐらいかな。もちろん、ただというわけではないのよ。彼の秘書ということで毎日彼の会社に出勤しているわ」

「五十万。」

三人は呆れたような表情でお互いに顔を見合わせた。

「あなた、一口に五十万円っていうけど相当な大金よ。恐ろしいくらいよ」

「北村のおばさんの言うことはよく分かります。私だつてお金が無くて食べ物も買えず、水だけで過ごした日もありますから、お金のありがたみはよく知っています。もち

ろん、怖さも。最後の皆はお金、という考えは今でも変わらないわ。無駄遣いはしてないつもりよ。今着ているもの、持っているものはみんな誠が買ってくれたものよ。誠は特に金を残す必要もないから、私にくれているんだって。その代り、彼といつも一緒よ。大事な大事な彼女だから片時も離れたくないんだって」

「今回はよく一人で来させたわね」

「二時間おきに連絡するというのが条件なの。まして今回は私の結婚式のことでしょう。誠は、嫌とは言えなかったのよ。私、自分の家族とは絶縁しているでしょう。身内がだれもいないのよ。だからどうしても三人には出席してほしいのよ。それに先生には祝辞も述べて頂きたいし」

「いや、それはちょっと。無理でしょう」

「無理は承知できました。先生、みなさんどうかお願いします。来年の一月三十日なんです。神戸のホテルで挙式します。みなさんのホテルも二泊仮予約をしています。交通費も全額こちらで負担しますと、誠も言っております。私がまともな道に歩めるようになったのは三人の方のお陰です。娘、姪と思つてどうか助けてください。お願いです」

泣けんばかりに言つて、ジュリは深々と頭を下げるの

だった。そして、頭を上げるやいきなりスマートフォンを取り出して電話番号を押し始めた。

「誠、私ね、今先生の事務所にいるの。そう、三人の方たちお揃いよ。今、結婚式のご出席についてお願いしているところ。誠からもお願いして。まず先生ね」

そう言つとジュリは小山にスマホを渡した。

「いやあ、これは本当に現代版シンデレラ姫かもしれないですね。結婚相手の安藤さんという方もしっかりした方のようですし、人生経験の少ないチャラチャラした若い者よりよほどましかもしれませんね。こんなこと実際にあるんですね」

「先生、しかしこれは最後までしつかり見ていかないといいけませんよ。どこにどういう罠があるかわからないのが現代社会ですから。人物をこの目で確かめ、籍が入ったことを確認するまでは安心できませんよ」

「ということは、北村さん、式に出席されるということが前提なんですね」

「先生、ここまで来た以上最後まで見届けてあげましょう。今からなら予定は入れられるでしょう。それに私、神戸というところに一度行つてみたいのよ。ホテル二泊取つてく

れているつて言うじゃない。三人で行きましょうよ。智晴くんも一緒に連れて行けば植野さんもオーケーでしょう」

「しかし、ジュリちゃんも愛し合つていってまじつたが、本当に彼女は愛しているんでしょうか。また、男性もこれまでいくつもの出会いがあつたと思つたんですよ。それに今になつてなぜ結婚なんて言つ道を選択したんでしょうか」

「私は女性として思つただけど、ジュリの心の深層には強い、しつかりした頼りになる男性願望があつたと思つたんですよ。それがたまたま安藤さんだったのでないでしょうか。それに、これは一般的にですが、底辺の生活者は上昇志向が強いんですよ。もちろん、中にはそんな気力も失くした者もいるけど。その日の食事にも困るような生活をしている者の上昇志向を失わせないようにすることは大事ね。また、幸いなことに、ジュリは学ぶことへの志向がまだ枯渇していなかったことですね。これは彼女の生まれながらにしての資質でしょうが、貴重ですね。先生は六十歳過ぎの男性としてその半分の年齢の女性と結婚するということに対してどうお考えですか」

「一時の付き合いならあの世への手土産話としてもよいでしょうけど、無理ですね。第一、話が合いませんよ。それ

に男性は衰える一方、ところが女性は盛んになるだけ。このギャップは埋めがたいし、トラブルの第一原因でしょうね。考えても見てください。男性が八十歳のときジュリはまだ四十歳の女盛りですよ。どうするんですか。もし、彼女が浮気でもしたら嫉妬に狂った彼が刃傷に及んでしまっんじゃないですか。人の感情で最も怖いのは嫉妬ですよ。悲劇を避けるためにも一時の感情に走らないほうがいいですよ」

植野とジュリが去った後、小山と北村はジュリの行末を心配するのだった。

「そこなんですよ。安藤さんは随分と人生経験を積んでおられるんでしょうから先生の言われたことも十分承知の上での決断だったと思うんですよ。それを敢えて結婚まで行くというのは愛だけでは説明つかないと思います。私もこういう立場なので男と女の修羅場はいくつも見てきました。多くは金銭と男女関係のもつれです。金銭と言ってもお金が無いための口論や罵り合いですよ。結局持たざる者同士のトラブルです。ジュリたちは、安藤さんの事業が順調である限り金銭のトラブルはありませんね。愛情がらみのトラブルはこれは難しい。結局、ジュリの気持ち、考え方次第でしょう。彼女が安藤さんから離れなければ、また、

安藤さんがそう信頼し続ければ彼女の幸せは続くでしょうね」

「今、話を聞いて気が付いたんですけど、安藤さんにとってのお金・財産はあまり意味がないんじゃないでしょうか。彼には身内がないって言っていましたね。資産を残すべき対象がないというわけです。今までは金儲けの面白さで事業を拡大し、成功を収めてきたわけですが、六十歳になって、はたと気づくことが出てきたのではないのでしょうか。六十歳は還暦、岐路です。莫大な資産を死後国に没収されるのか、はたまた遺産受取人をつくるべきかと。おそらく彼は自分の子に残したいと思っただけに違いありません。若く、健康で美しく、意欲的な女性であれば彼の子どもを産むことは容易だと思つたのです。それがジュリだっと思えます。ジュリに関し、安藤さんにとってさらに利点に思われるのが彼女に係累がないということです。実際には別れた父、そして母と弟がいますが、絶縁状態ですから彼らが絡んでくることはほぼ無いと踏んだのでしょう。これは大きいと思います。親類と称する者たちが遺産をしゃぶりつくす光景を彼は、これまでたびたび目にしてきたに違いないからです。ジュリほどのお金への執着心が強い子であれば、例え親族が手を伸ばしてきてもジュリは撥ねつける

に違いないからです。そして、彼がジュリの向学心を一番喜んでいると思います。彼女を实地で彼が鍛え、大学で理論を学ばせればジュリは立派な安藤さんの事業の後継者になるはずですよ。それにもしかしたら彼にはジュリをファーストレディーに育てたいという秘かな願望もあるかもしれない。これは老いてみないと分からない心理ですね。私には彼の願望がよく分かります。安藤さんはここまで考えているような気がしません。やはり会ってみたい人物ですね。そして、予想だにもしなかったジュリの今の姿を確認したいのです」

「世の中には想定外のことというのはあるものですよ。ひよっとすると男の食い物になって終わるか、貧乏所帯で一生終わるかも知れなかつたですから。私ももつと謙虚になつて世の中に接していかなければなりませんね。反省しています」

「本当に北村さんがおっしゃるとおりです。世間には毒もあるけど薬もある。しかし、毒だけ、薬だけの世ではないということですね。人間諦めてはいけませんね。しかし、先ほど話したのですが、彼女が本当に彼女の言うとおりの存在になっているかはまだはっきりしていませんね。彼女の幸せを祈る意味でも結婚式に参列しましょう。私も

精一杯努力して彼女のための祝辞を考えます」

北村と小山は互いの思いの丈を吐き出したためか安堵の表情になつていた。半分ほど開いている窓からすがすがしい風が入り、二人の頬を撫でていった。

「実りの秋ね」

「そうですね。今年は果物も米もきつと豊作に違いないでしょう」

小山は北村の言葉に笑顔で応えた。

「ジュリ、今日神戸に帰るのね」

「ええ、そつよ。誠が帰りの新幹線のグリーン車のチケットを早めに取ってくれていたの。とにかく彼に心配させないようにするのが一番なのよ。やはり年の差を気にしないで言つてもそれは無理なのよ。特に私が若い男と話しているときなどに見せる彼の険しい表情は、怖いくらいよ。本当は私、あまりに男には興味がないのよ。男はみんな私をセクシーな女とセックスの対象に見ているけど、セックスは嫌いよ。今まで本当に好きな男としてないからかもしれないけど。でも、誠とは別みたい」

「別というつ。チランママだから言うつけど、なんか身体がすごく疼くし、熱くなるのよね。チランママはどうなの」

「私はもちろんすぐく燃えるし、気絶寸前ほどの快感よ」
「へえー。みんなそうなんだ」

「馬鹿ね、ジユリ。こういうのはみんなというわけでもないのよ。人によってそれぞれなのよ。だから女のほうも反応はそれぞれよ。あんたは、男経験が多いのに「こういうことは無知なのね。風俗での男とは商売上のことだからね。セックスというのは気持ちも大事だからね。気持ちの入らない男とのセックスは大根を食べてるように味気ないものよ。ここんところはあんたも分かるでしょう。ところで自慢じゃないけど、私は最高レベルの女よ。男に後悔させたことはないわ。だけど続かないのよね。浮気っぽい私の性格が災いしているんだわ。とにかくジユリはまだ若いからこれからよ。たくさん男遍歴して女を磨くといいわ。そのうちきつと私みたいな極上の女になれるわ。あつ、これだめか。あんた安藤さん惚れてんだから浮気はできないね。何しろジユリと誠の関係だもんね。ごめん。」

「チランママの言うとおり私は誠に惚れているのよ。男修行は私にも魅力ですが、無理ね。チランママのいう極上の女という話ね。それに近いこと私は随分と言われてきたわ。川崎のストーカー男もそう。この男は、私のことを極上の和牛霜降りの味だって。人を牛に例えるなんて馬鹿にして

るわ。誠も私のことを最高の女だといつのよ。今まで出会ったことのないような極上の女だといつの」

「それどころか」
「こんな話、先生や北村さんの前では言えないからチランママだけに言うね。あの時の私の体全身、ピンクに染まらなだって。特に上気した桜色の顔、うつろな目、小鼻を膨らまして耐えている表情がたまらなく好きだつて。しかも、全身が北村の体を包み込むようになるらしいの。北村がいうには、ものすごく締めまり、その上、誠が私の体を力いっぱい抱きしめてもまるでこんなにやくを抱くように抵抗感が全くないんだつて。骨を感じないというの。体の筋肉が柔らかく膨張し、その中に誠の体が埋まっていくようなんだつて。不思議な身体だとまじめにいうのよ。私はその時自分がどうなっているかさっぱり分からないんだけど、今までの男たちとはなかつた不思議な感じが襲つたの。なんと

「なによ、あんた。私より上を行ってんじゃないの。呆れたわ」
「それから・・・」
「えつ、もっとあるの」

だつて」

「なによそのマンガラゲって言うのは」
「私もよく分からないからインターネットで調べたのよ。そしたら朝顔みたいな白い花が咲く植物で、それでチヨウセンアサガオとも言うらしいの。毒があるんだつて」

「毒」
「そう、毒が、しかも猛毒らしいの。有吉佐和子という作家が書いた『華岡青洲の妻』という小説で有名になつたらしい。マンガラゲは、曼荼羅華という難しい漢字よ。華岡青洲は江戸時代の終わりの医者で、麻酔剤を開発し、日本で初めて乳癌の手術に成功した人よ。この麻酔薬は、このチヨウセンアサガオとトリカブトを主成分にして作り、通仙散という名前でも実用化されたのよ。これはみんなインターネットから受け売りだけだ」

「それとジユリがどう関係するわけ」
「私も誠にしつこく聞いたんだけど、今に分かるつて言つて笑っているだけで教えてくれないのよ」
「だけど安藤さんはジユリのことを毒女と言っているのと同じじゃない。これつてすごい侮辱よね。やつぱり彼はジユリを安っぽい場末の女と見ているんだね。そんな風に思っている女とどうして結婚なんかするんだらう。やつぱ

りこの結婚怪しいわ」

「誠は私のことをそんなふうには見てないと思つた。だつて私に子どもを産んでくれていつも言っているのよ。それでも多ければ多いほど良いんだつていうの。私のことを安い女と思つていたらそんなこといふかしら。やはり私は誠を信じているわ」
「信じるのはかまわないけれど、安心はしないでよ。いとおつぱり出されるか分からないから、そのときの覚悟と用意だけは忘れないでね」

「私、今までずつと人を信用しないで生きてきたでしよう。ずいぶんがんばつてきたんだつていうことがよく分かるのよ。どうしてかという、人を信用しないつてことは孤独なのね。無人島ならいざしらず、人がうようよいるこの社会で孤独で生きるといふことは、とてつもないエネルギーが必要なのよ。このエネルギーつてすごく無駄なものと同じで疲れてきているということにも気がついてきたのよ。もちろん、全部が全部を信用するなんていうことは今でもないよ。でも一人だけでもいいから信用できる人がほしくなつたのよ」

「ジユリのいうことよく分かる。私も時々一人になりた

いつて思うけど、それは思うだけね。とても恐ろしくて一人になんかなれないわ。そう思ったび男に惚れて、そして振られる、その繰り返しの愚かな女よ、私は。でも、ジュリが安藤さんのことを信用しているってことが本当なら、あんた安藤さんに惚れたっていうことね。それはいいことよ。例え振られてもいいから、本当の恋をするっていうことは長い人生の中できつと肥やしになるわ。でもこれだけは覚えておいてよ。もし、本当に結婚したらそのときからあんたの戦いは始まるのよ。どういふことかって。それはね、ジュリが女としてこれから成長する。けど、安藤さんは男として下り坂。いわば交尾を終えたオスの鮭。それだけに輝きを増すあんたへの嫉妬は普通ではないわ。ジュリにも経験あるはずよね。人間の感情で最悪なのは嫉妬、そして劣等感よ。ひよつとすると、安藤さんはこれから嫉妬に劣等感をプラスした感情でジュリを見ていくかもしれないわ。そうなったらジュリは息もできないような生活を送ることになるわ。この嫉妬や劣等感を安藤さんに絶対持たせない心配りをしていくこと。これが私の言う戦い、分かる」

「チランママの言うこととても分かるわ。さっき、誠が私を毒のある女と言った、と言いましたよね。誠は、私の身

体が男には毒だつて言っていると思つたよ。多分、誠は男が私の身体を知つたら離れられなくなる。私を独占するためならなんでもやりかねなくなるっていうの。どうもそのことをマンガラゲに似せたんじゃないかと思つたよ。でも、調べて分かつたんだけど問題は分量なのよ。その量は微妙だけど匙加減を誤らないと薬になるって言うわけでしょう。そのさじ加減を誠は知つたということなのかなあ」

「ジュリ、あんたは毒女ではなく、マンガラゲの女ということか。これビミョウね。マンだけだと厭らしいし、ダラケだけだと汚らしい。でもマンガラゲというとなんとなくエキゾチックな感じがしてクールじゃない。私、それ気に入つたわ。でも安藤さんつてなかなか学のある人ね」

「曼茶羅という言葉自体、梵語といつて古代インドの言葉らしいからエキゾチックと言えばエキゾチックなのよね。それは、それとして、やはり誠は私の浮気を一番心配しているのね。他の男とチョイの間なんてして、尻尾を捕まるなんてくだらない女のことよ。あるいは金、暇のある女よ。私はそんな馬鹿なことで幸せを棒に振るなんてことはいらない。誠にもはつきり言つた。そう言つても疑い深いのは人の常だから、彼に疑いを抱かせることはしないようにがんばる」

「ジュリ、そうは言つてもこれは大変なことよ。この先何十年続くことか。難しいと思つた」

「チランママ、心配ない。せいぜい後十年よ。誠も七十にもなつたらきつと諦めもついて寛大になるわ。この十年間で、私は、誠を私なしでは生きていけないようにしちゃうから。いい嫁、いい母に絶対なる。これは自分の幸せに繋がることだから苦労じゃないわ。もう、掃き溜めのような生活には絶対戻らない。そう決心したの。だから、私の結婚式には必ず出席して。そして、私のこの決心を後押ししてよ。お金のことは心配しないで。旅費も滞在費も少し上乗せして出してくれるっていうから、チランママの出費はないと思つたの、お願いね。ママが出席すると言えば先生も北村さんも出席してくれるわ」

「ようし、分かつた。マンガラゲの女の前途を祝すためにウツハラご一同様で神戸に行きましょ。ここんところ旅行なんて何年もしていないから、智晴もきつと喜ぶわ。それに智晴は電車が大好きだったから、これはジュリからの思いがけないプレゼントなのかも。ありがとう」

日が落ちて気温が下がったよつた。駅に向かう狭い商店街は夕方の五時過ぎとあって、買い物客や行き交う人々で混雑していた。植野はジュリの腕を取つて人々の中をゆつ

くりと歩いた。

「今夜の月はきつときれいね。ジュリは新幹線の車窓から見るのかしら」

「見えるといいね」

「神戸の夜景はきれいというでしょう。ジュリやみんなで見月のかかった百万ドルの夜景楽しみたらいね」

「そうしよう、チランママ」

二人の姿は暮色に染まり始めた街の人の流れに溶け込んでいった。踏み切りの警報のリズミカルな音がだんだんと高く聞こえて来る。すぐに、特急ロマンスカーのファーン、ファーンという軽やかな警笛が近づき、そして過ぎ去つて行った。

— 完 —